みのるの日記

2016年10月4日

黒川ダリヤ園(吟行記)

2016年10月4日 20:56

秋霖が続いていたのでお天気が心配されたが薄雲が覆う程度の曇天、妙見の山襞から湧くような霧が見えたので雨は大丈夫そう。今日の吟行地は、日本一の里山といわれる兵庫県川西市の黒川地区。９時３０分能勢電鉄妙見口駅に集合、１３名のメンバーが揃った。車移動で旧黒川小学校（黒川公民館）へ向かう。

妙見山（みょうけん）を隠さんと霧立ちのぼる　せいじ

二タ股に道しるべ立つ露葎　みのる

旧黒川小学校は、奥の校舎が明治２８年に、手前の校舎が昭和２２年に建てられたそうで、現在は公民館として使われている。ノスタルジックな校舎内を見学したあと裏山にのぼって里山の秋を聞く。展望広場には手作りのピザ窯が設けられていてシーズンにはここで楽しいイベントが行われるのだろうなと想像が膨らむ。

簾吊る木造校舎外厠　うつぎ

枯木立幹に銃猟禁止札　なおこ

GHのホープ、なおちゃんがこんな句を詠むまでに成長した(^o^)v

次なる吟行地黒川ダリヤ園までは里山の棚田ながめに農道を歩く。途中の農小屋で作業中のおばさんたちと出会ったので挨拶を交わす。裏山で収穫した栗を出荷のために選果されているとのこと。旧黒川小学校の裏に見えた栗山はナラ枯が進んでいるようだったので、そのことを尋ねると山の急斜面での収穫はとても重労働なので枯れてなくなってくれたほうがいい…と高笑い。俳句を勧めてみたがあっさりと断られた。

谷戸の棚田はほとんどが苅田になって穭（ひつじ）が伸び始めていた。ここもまた猪や鹿などの被害があとをたたないという。蛇行しながら高鳴る秋水の楽やＢＧＭのような虫の声に癒やされつつ農道をさらに進むと、ほどなく目的の黒川ダリヤ園に到着。日焼け顔で微笑む受付のおばさんに迎えられた。

ちかみちと里人の指す露の道　みのる

ダリア園は、櫛の歯状に高畝が築かれ、そこに幾種類ものダリアが植えられて咲き競っていた。その規模は３３０種１７００株とのこと、園丁さんたちは接近する台風に備えて支柱などの補強をしておられた。棚田を利用して拓かれたようで周囲の里山風景とも和してメルヘンチックな風情を楽しむことができた。

ダリア園こんなに種類多しとは　ひかり

夢比べてふ花ダリア競ひ咲く　ともえ

背高のダリアの毬とハイタッチ　みのる

移り気の蝶落ちつかず花ダリア　みのる

農小屋を隠すばかりに秋桜　よう子

一枚はコスモス咲かす棚田かな　みのる

しばらくは馬柵に凭れて秋惜しむ　みのる

小動物が大好きなぼくは、名所旧跡を訪ねても真っ先に彼らを探しだして存問し、その営みを観察する。健気に生きている彼らから命のメッセージを聴くためである。またその土地の人たちと出会うと必ず声をかけて話しかけてみる。俳句を詠みにきた…というと大抵は何かしら反応がある。その一期一会の会話からも句が授かるのだ。

あれこれ考えながら苦吟するのではなくて、豊かな人生の瞬間を切りとるための愉しい吟行でありたい…といつも願っている。成績の虜になる必要はまったくない。

人の集まるところでは、その生活ぶりや言動を観察する。幼子たちのそれは特に興味深い。水や風の音、風に舞う落葉や落花など動きや変化のあるものに五感の全てを働かせてアンテナを張る。瞬間の変化を捉えると佳句を得やすいからだ。句を詠まねば…という思いに呪縛されず、脳や心は自由に遊んでいる状態でなければ五感は機能しない。

強風が吹き荒れたり雨や雪の降るような悪天候を嫌う人もいるが、ぼくはむしろ歓迎する。なんの変哲もないような対象物であっても普段では見ることができない表情を演出してくれるからだ。水打たれた石畳は絶品だし時雨に濡れた碑や石人は泣き顔や怒り顔に変わる。ときには笑っているようにも見える。

濡れた舗道にうち敷く落花も風情があるし雪間を割って覗くものの芽や踏まれた靴跡に起ち直ろうとする草々をじっと見ていると命の尊厳を覚える。書き出せばきりがないけれど、こうした大自然の営みの全てが俳句の原風景なのだ。身に危険の及ぶほどのリスクがない限り吟行は中止しないというのが先輩から教わった流儀である。

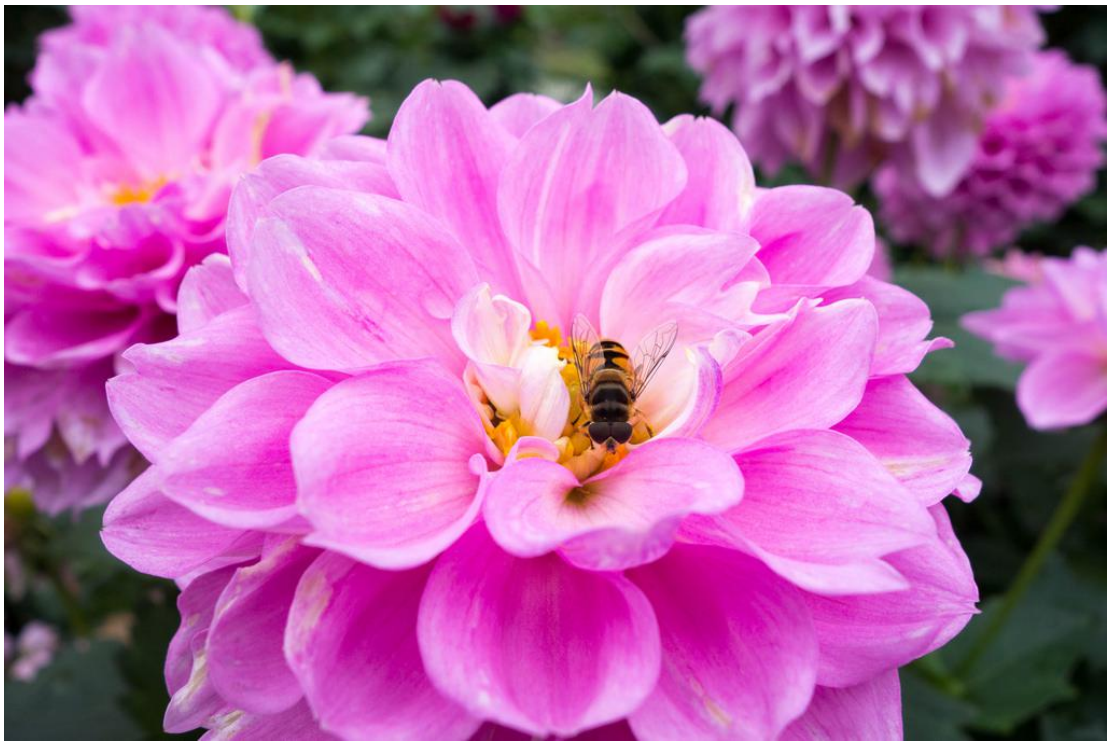
美しい風景を写生するという点では、とうてい写真や絵画を超えることは難しい。けれども俳句は生きとし生けるものの命を写しとり、その感動を仲間と頒かちあうことで自分自身の生きる力に変えることができる。なんでもない生活身辺の独り言や葛藤を俳句に託して吐き出すことで、こころの中を掃除するのである。

> "俳句は私の人生"

といわれる品女さんのルーツはここにあるのだと僕は思う。

五感のアンテナを畳んだまま、頭の中で五七五を組み立てながら漫然と吟行を重ねても吟行上手にはなれない。何に感興を覚えるかは人それぞれであり、それが作者の個性なので、みのる方式がすべての人に適合するとはいえない。けれども自分なりのアンテナの張り方を再チェックしてみることは必要かもしれない。

閑話休題…吟行記から脱線しました。



蜜蜂にくすぐつたさう花ダリア　みのる

ダリア園の四阿でみんなでお弁当を囲み、持ち寄りのお菓子を頒けあいながらぺちゃくちゃとおしゃべりの花が咲く。吟行で一番楽しいひと時である。昼食後も熱心組は再び行動を開始し少しはなれて句作や推敲に余念がない。やがてタイムアップとなり車で句会場へと移動した。道中、以前に炭焼き吟行で訪ねた今西さんのクヌギ山や、湯立て神事吟行で歩いた里山の畦道風景などが見えて懐かしかった。

芋茎干す茅葺屋根の深庇　うつぎ

句会場は、妙見口駅近くの吉川公民館。ほとんど毎年お世話になっていてすっかりお馴染みだ。楽しみにしていた友恵さんの手作り和菓子に舌鼓をうち、幸せな気分に浸りながら無事句会終了。駅頭の売店で家苞に能勢栗を買い、再会を約しながらレトロな能勢電車両に乗って帰路についた。

吟行の句友は宝秋天下　みのる

万端の準備でお世話してくださった能勢チームの皆さんに感謝！

feedback | page_top

© やまだみのる
http://gospel-haiku.com/